

# 火星

平成二十三年九月号



七曜抄

(七)

山尾玉藻

黙禱の起立に揺らぐ残暑かな

白桃を剥いて身の内濡らしけり

苧殻折る力を母が出しにけり

内浦に雨のとどまる盆会かな

鮎鯨の桶干し盆も過ぎにけり

鬼灯のかたむいてゐる潦

あるなしの瀬音に秋の種蒔ける

水の辺に咲き朝顔の団十郎

秋蝶に忍び返しのあるりにけり

抽出しに切手こまごま星月夜

# 太白星

柳生千枝子

人類に旧と新あり泉湧く  
老ゆるとは記憶あとさき百合匂ふ  
時無しのケアハウス午後昏れ遅き  
梅雨の海拭く療苑の大玻璃扉  
風鈴に触れ透明な風の脚  
桜桃忌夕月皓くして移り  
太宰忌や少年河へ礫を打つ

杉浦典子

眼鏡屋に夕日差しぬる金魚鉢  
島めぐりの風つれてきし扇かな

袋角湿るてのひら嗅ぎに來し  
蝮酒 夫より先に試飲せり  
小流れを跳んで見にゆく夏蚕かな  
万緑や城なき濠に水満ちて  
身を退くといふことばあり濃紫陽花

浜口高子

田廻りの尾を休めては石叩き  
古漬けの甕を開けたりほととぎす  
花棕櫚に日暮れきてゐるゴルフ場  
噴水の穂へまくなぎの消えにけり  
あたらしき眼鏡に滝のしぶきけり  
藻の花の水湧くところ離れざり  
子の呉れし水の匂ひのかたつむり

# 火星作品

山尾玉藻選

くちなはの地に落ちし音背そびらにす  
明石戸栗末廣

木下闇出でたる声の囁れてをり

父の日の手を打てば寄る屑金魚

古稀とうに過ぎてをるなり昼寢覚

くるぶしに風なま温き栗の花

降りだして明るくなりぬ額の花  
八幡坂口夫佐子

水差せば硯ふくらむ星祭

襦宜の仰ぐ猿の腰掛朝ぐもり

上賀茂の堰のしぶきに蜻蛉生る

花蕊は乳房の高さ鉄砲百合

麦秋や女の廻すシネカメラ  
宝塚河崎尚子

喪を辞して日傘音なく開きけり

水分へ肩の螢の落ちにけり

朝ぐもりチエダーチーズに子の歯形  
萍を雨の叩ける藻刈かな  
舟虫や潮湿りせし歌枕  
実桜の葉隠れに明く沼島かな  
早苗饗や新の円座に風のきて  
二合半の過ぎし兄ぬて簞  
葭篋より青空見えて老いけらし  
滝殿へスリッパの音急ぎをり  
雨乞の蒲生野に鳶つつこみぬ  
河口出でボートたちまち灼かれをり  
宵風や魚網の干され梅干され  
花著莪に風の出できし蝮谷  
母が呼ぶたび南天の花こぼる  
濤音へ転げやすかり青梅は  
墓夕べ背負梯子が蔵の前  
捕へられ蝮瓶底ぬらしけり  
一つ葉の巖に日射す鑑真忌

神戸深澤 鱻

宝塚山田美恵子

山本耀子

# 選のあとに

山尾 玉藻

くちなはの地に落ちし音背にす

戸栗 末廣

作者は山中を歩いていたのであるか。不意に後ろで鈍い音がし、振り返るまでもなくその音の正体が作者には解つたのである。幼い頃から山野を駆け巡りながら培われた五感ほど確かなものはない。忽ち、作者の意識に少年時代がオーバーラップしたことだろう。

降りだして明るくなりぬ額の花

坂口夫佐子

句意は一読明快。雨が降り始めてそれまで萎え気味であった「額の花」に生気が蘇り、その所為で辺りが急に明るく感じられたのだろう。ささやかな発見ながら、いかにもざつぱりとした美しさの「額の花」らしい視点が、そこに作者の微妙なこころの動きを感じる。

麦秋や女の廻すシネカメラ

河崎 尚子

最近は女性監督の制作した映画が話題に上ることが多い。中で、河瀬直美監督の『殞の森』がカンヌ国際映画祭でグランプリを受賞した快挙は記憶に新しい。『殞の森』の舞台は奈良の山村であり、掲句の「シネカメラ」を廻す女性はまるで河瀬監督そのもの。女性らしいナイーブな感性が、カメラ

を通して「麦秋」の世界の奥にある遙かなるものを捉えていることだろう。

葭簀より青空見えて老いけらし

深澤 鱈

作者には「葭簀」からもれる夏空の青さが遙かなるものを感じられたのだろう。このような感覚をこれまで抱いたことがなく、これが老いと言うものかもしれないと実感したのである。偶、こころの弱りを覚える日だったのか、素直な思いがふと口をついてでた呟きのような「老いけらし」である。

牛角力果てしポピーに風ばかり

城 孝子

「牛角力」は迫力あるものであるが、負け牛のことを不憫に思うせいだろうか、見物後はどこか昏く重い思いが尾をひく。そのような心境の作者の眼に風中の「ポピー」がいかにも明るく爽やかに映り、ちよつと救われた思いとなったのかも知れない。「ポピーに風ばかり」はこころの写生でもある。

雨乞の蒲生野に鳶つっこみぬ

山田美恵子

「蒲生野」とは滋賀県近江八幡市の東部地方をさす万葉の古名である。作者は早つづきの「蒲生野」辺りを眺め、素朴な信仰の風習による「雨乞」にこころ巡らせていた。その時、不意に鳶が急降下した。古名の優美さと対照的な現実的表現の「鳶つっこみぬ」が、極暑の感をいやが上にも高めている。



# 恒星圈

垣岡瑛子

青梅雨や写真に子規の見当らず  
ゆりの木を離れて見たるゆりの花  
節にきつき指輪となりぬ夏の雨  
青虫とる箸をたてをく芒種かな  
小さき手をかさねてきたる夕端居

大山文子

加古みちよ

菩提樹の花女子大の昼休み  
ブルーシートありし辺りの煙の木  
青大将にまづまみえたり春日山  
子燕の並ぶおいどの眠りぬし  
ぶんぶん警備会社のステッカー

あぢさぬや夢にはいつも育ちし家  
あぢさぬに声美しき人とをり  
虹立つとクレパスの色揃へをり  
梅雨の月法話いよいよ核心に  
明易の一夜を眠る肘枕

長田曄子

河崎尚子

右に杖左に新書薄暑かな  
片蔭をくるよいつもの前屈み  
水晶の数珠の腕や薄暑なる  
膝立ててメールの男遠蛙  
南風吹く庭師の腰の白手拭

梅雨月や軍港と浦背合はせに  
オランダ坂のしつぽく屋の灯梅雨に入る  
デイゴの花グラバー亭の滝へ落つ  
広東語の飛び交ふ飯屋梅雨最中  
五月雨や沖の生箸へ宿の舟

# 獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

天谷翔子

玉砂利の濡れ照つてゐる夏つばめ  
山法師遙かにしたる夕ごころ  
青梅の落ちたる音と思ふ夜は  
金網の石嚙みゐたる朝ぐもり

藤田素子

あぢさゐの色の揃はぬ朝かな  
夏瘦を氣遣はれぬし赤信号  
夏至の日の光まみれの団子虫  
螢の夜温泉玉子なぞ食うべ

奥田順子

夏萩や処刑の数の五輪塔  
懐に形代ありて磔半ば  
投函の音のかすかに枇杷熟る  
堰越えて水の奔れる竹伐会

根本ひろ子

地卵を割りたる音に夏立ちぬ  
木苺の映れる水を掬ひけり  
更衣して先生に会ひにゆく  
切り岸の草吹かれぬる土用かな  
父の日や水しづくする飼葉桶  
すて苗の色濃かりけり祭笛  
暑き夜のサイレンが脇すり抜けし  
嘴の急転直下夏盛る

藤本千鶴子

右肩のさがるは母似花檮  
板前が裏に顔出す梅雨出水  
高樓の声の降りくる五月闇  
裸婦像の青葉若葉にぬれぬたり

高橋芳子

九頭竜川の夜釣に届く篠の笛  
ひと鳴きの雉に梅雨の来たりけり  
水送る里の十葉汚れなし  
夏立つやピルの谷間に干す病衣